

工芸品の試作研究

— 漆 物 (I) —

上原守峰 日高富男

創作漆工芸の確立のために、数名のメンバーが集まり漆物の産地である川辺町共同高等職業訓練校で漆の基本技術を1年間かけて収得した。本年度の試作品は、この研修を基にしたものであるが変わり塗りと呂色技法を応用した製品、コースター5種30点、ランチョンマット5種5点、ペーパーウェイト7種16点、合計17種51点の試作を行ない、加工性、装飾性について検討を加えた。なお、試作品は研究成果発表会で実用に則した展示を行なった。

1. はじめに

本県の漆物は伝統的工芸品に指定されている川辺町の仏壇業界に普及しているが、その他は一部竹製工芸品に利用されているのが現状で木製工芸品分野への利用は皆無に等しい。

屋久杉を主体に家具業界が発達しているので、柰目の肌合いを生かした塗装法になっているのはごく自然のことであるが、屋久杉自体、良木の不足や計画伐採等で原材料の供給に不安がある。将来のことを考えると屋久杉以外の樹種を利用開発研究することは、木製品製造業界にとり必須のことといえよう。そこで、様々の木を使いこなし、高品質化を図っていくために漆の技術がクローズアップされてくることになる。

以上のことに同意するメンバーが技術を修得し、本県漆工芸を浮揚させていこうということになった。屋久杉に従事する人2名、挽物を始めたばかりの人、木彫で看板をつくったり版画もしているイラストレーター、美大卒で漆に興味をもち経営する飲食店で流通を担当する人など漆に興味を感じる人、漆で製品の付加価値を高めていこうとする業者の集団である。

1年間、第2・4日曜日に川辺町共同高等職業訓練校で実技をメインにして鹿児島の漆工芸産業はどうあるべきかなど話し合っていた。講師には、元市工芸指導所職員で現在漆で自活している人、会津よりこの地に住みつき長年仏壇の加飾技術を指導してきた蒔絵師、産地の若手塗師2人を招いた。

研修した内容は、漆素材の知識、ヘラ・ゴミ取り針の製造と使用法、漆刷毛の仕立て・手入れ・使用法、漆のこし方、色漆の製造法、本固地、ボンド下地法、刷毛による呂色塗りと塗り立て法、スプレーガンによる塗装法などである。塗師の工場での実習、漆家具の修理、塗産業に携わる人々との意見交換も含め、基本的な塗物技術を学び取った。現在は、これらの実習を踏まえ個々に創

作漆工芸品を模作中である。

本年度試作した製品は、この1年間の研修を基にしたものである。

2. 概 要

2-1 開発コンセプト

- ・創作漆工芸グループの育成
- ・地場漆工芸産業の技術向上
- ・漆の各種技法を用いたクラフト製品の開発

2-2 デザインコンセプト

① 素 材

板物（コースター、ランチョンマット）には反り防止のためシナベニヤを使用し、ペーパーウェイトには石や硬木であるイスノキを使用

② 形 態

形は単純明快なフォルムにし、漆の素材を生かす。石は自然にでき上がったものを使用し、卵型で上から少し押しされたような形を探す。

③ 装 飾

色は漆の伝統色である黒と赤を基調にする。又、ユーザーの多様化する要求に対応できるよう多品種少量生産することを考慮し、同形のモノには異なった塗装法を、異形のモノは同色にし色と形にバリエーションをつける。又、コースターは並べた時に変化がつくように対角の部分を非相似の三角形で塗り残す。

④ 機 能

・コースターは銘々皿としても使用できるよう板物にする。ランチョンマットは両面使いが可能なように表裏異なる色で塗り多くの食器がムリなくセッティングできるよう板で構成する。両方ともにガラスコップなど底面の平滑度の高いものが水滴でくっつかないように、スプレーによる変わり塗りをし凹凸面をつくる。

・イスノキのペーパーウェイトは、そのままでは重さが

不十分なので内部に丸鋼を挿入する。

⑤ 寸法

- ・コースター 9×90×90
- ・ランチョンマット 9×300×400
- ・ペーパーウェイト (角型) 38×38×120
- ・ " (丸型) 70φ×40
- ・ " (卵型) 75未満のもの

⑥ 仕上

カシューの塗り立てと呂色仕上の2通り。

2-3 変わり塗りについて

① 流し掛け技法による装飾

焼き物の技法の一つである流し掛け技法を厚盛装飾として応用してみた。焼き物の場合には、筆に釉薬をたっぷり含ませて勢よくかけるのであるが、陶芸の釉と比較して木工用塗料では粘度が高いため繊細な表現はできにくい。そこで、塗料の含みをよくするために5kgのサーフェサーの缶の深さに合わせて、直径20ミリ、長さ270ミリ程度の鉛筆型の棒を製作した。先端には針釘を使用した。この工具だと先端が細いため流し掛けの際に線の太さが調整できるし、20ミリの直径は塗料の含みもよく線のとぎれも少ない。

今回、用いた塗料は黒のサーフェサーであるが、流し掛けをした後にパール顔料を筆で付着させてみた。パール顔料をサーフェサーの厚盛された表面に蒔いただけでは密着度が悪く、粘度と厚みにもよるが数分間放置した後に表面に筆圧で傷がつかなくなった頃、筆にパール粉をたっぷり含ませて付着させると結果はよい。ただし、細い線と太い線とでは明らかに細い線の方が乾きが早いので、均質に粉が付着することは難しい。又、サーフェサーの色によってパール粉の発色は異なるし、ビビッドな色が欲しい時にはウレタン塗料でも同じ方法で可能である。

この技法は、工具の勢いを生かすことと、塗料の粘度調節が重要であるが、大小の線を直線的に交わせ樹木風にしたり、波線にしたり自由な線の表現や厚盛ができる。だが、平面としての使用で上にモノをのせたりする場合には、線の大小により不都合を生じることもあるのであくまで装飾を中心にして考える方が効果的であろう。平面のみでなく立体にも応用できるが、立体的場合には大きさが問題である。モノを動かして流し掛けをする必要があるからだ。蓋物にも合口に糸を巻いておけば、線がつながり塗料が乾いてから糸を抜けばよく応用できる。

欠点としてあげられることは、自由で勢いのある線を表現するのに数回にも及ぶ練習が必要になることと被装飾物の枠をはみ出すほどの勢いで流し掛けしないと端の

方の線が死んでしまうので塗料が不経済になる点である。

② レザートーン仕上

黒色のカシューでベースコートを施した上に、黒や赤の斑点をつくるように吹きつける。塗料濃度を薄めにしておいてガン圧を下げる。ガン圧で斑点の度合いが微妙に大小に変化するので、表裏にこの仕上を使用する場合には斑点を描えることに留意する必要がある。斑点の小さいサテン風仕上にすると、ベースコートの平滑度のムラが解消される。

今回はカシューを使用したけど、レザートーン用塗料もあるのでこれを使用しても面白いテクスチャーが得られよう。

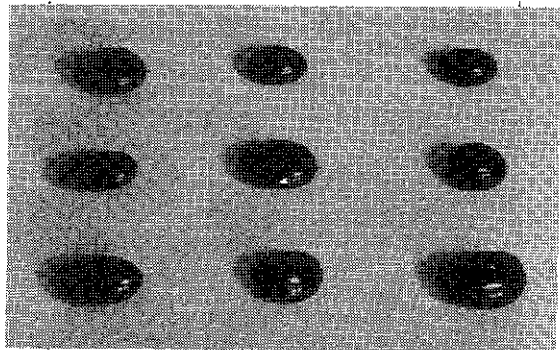
③ マーブルコート仕上

アクリル樹脂系塗料で乱糸状特殊模様が作られているが、カシューを使用してみた。黒色のカシューでベースコートした上に赤の乱糸状特殊模様をスプレーガンで吹きつける。塗料を硬めにしておき、ガン圧を上げ丸吹きにする。吹付ける量が少なければ、極細の線がからみ合い和紙の繊維風にも見える。

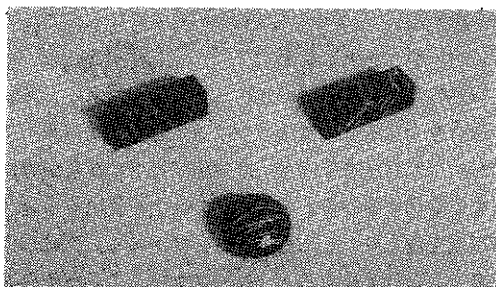
3. まとめ

陶芸技法を応用した流し掛け、スプレーガンによる変わり塗り(レザートーン仕上、マーブルコート仕上)、呂色塗りと4種の技法をカシューを主に使用し試作した。レザートーン仕上では、塗料の濃度が薄いので問題はないが、マーブルコート仕上は塗料濃度の濃さのために、極細の線以外の斑点部分にそう目立ちはしないが塗料の落ち込みが見られた。この点を除いては、当初の目的は達成された。

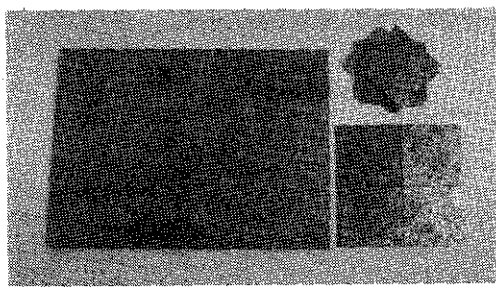
これらの装飾技法を用いて、来年度も引続き試作を重ねていく予定である。



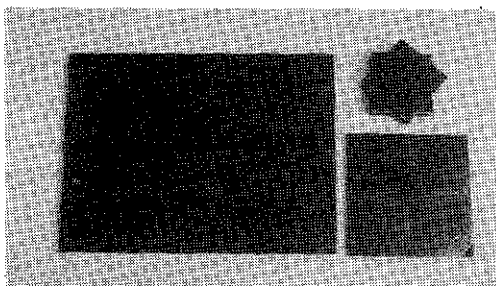
- ・ペーパーウェイト (卵型)
- ・素材 石
- ・技法 呂色
- ・塗料 カシュー (黒)



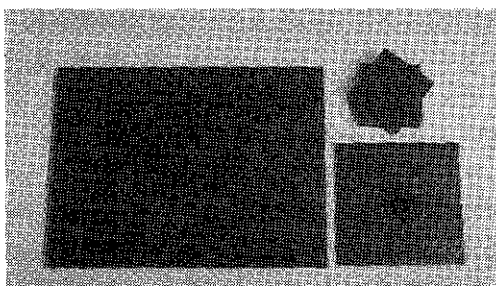
- ペーパーウェイト（角・丸型）
- 素材 イスノキ、プラスチック、コジイ
- 技法 サーフエサーの流し掛け
- 塗料 カシュー（黒）、サーフェサー（黒）
パール顔料（金・銀）



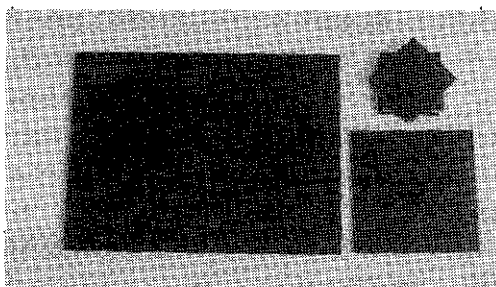
- ランチョンマットとコースター
- 素材 シナベニヤ
- 技法 レザートーン仕上
- 塗料 カシュー（黒）、パール顔料（銀）



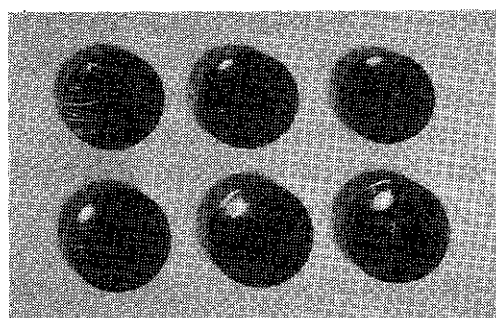
- ランチョンマットとコースター
- 素材 シナベニヤ
- 技法 レザートーン仕上
- 塗料 カシュー（黒）



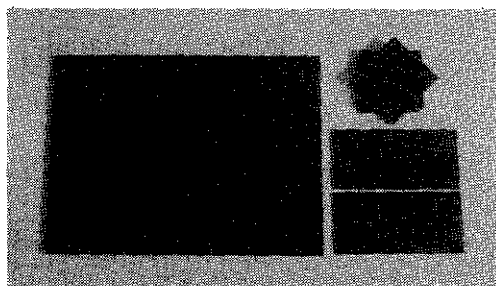
- ランチョンマットとコースター
- 素材 シナベニヤ
- 技法 マーブルコート仕上
- 塗料 カシュー（黒・赤）



- ランチョンマットとコースター
- 素材 シナベニヤ
- 技法 レザートーン仕上
- 塗料 カシュー（黒・赤）



- 盃
- 素材 コジイ
- 技法 流し掛け
- 塗料 カシュー（黒）、ウレタン無鉛800番（赤）



- ランチョンマットとコースター
- 素材 シナベニヤ
- 技法 レザートーン仕上+カシュー
- 塗料 カシュー（黒・赤）